

自由意志の実験哲学の展望

太田紘史 (Koji OTA)

東京大学

人間は、どのような行為に対して、自由意志や道徳的責任を帰属するのか。これまで実験哲学は、調査実験を通じてこの問いに取り組んできた。とくにそこで焦点を当てられてきたのは、人びとが下す判断において、自由意志（あるいは道徳的責任）の概念が（非）両立論的な仕方で作動するものなのか、また自由意志（あるいは道徳的責任）の帰属においてどのような心理的要因が働いているのか、といった点である。

これまでの調査実験によって示唆されてきたところによれば、(1) 人びとはこの世界が自由意志の存在する世界であると考えており、この傾向はいくつかの文化圏を通じて共通している (Nichols & Knobe 2007; Sarkissian et al. 2010)。また、(2) 人びとが自由意志（あるいは道徳的責任）を決定論と両立可能なものとして判断するかどうかは、呈示されるシナリオや質問のバリエーション（例えば抽象的な問いを与えるか具体的な問いを与えるか）に可感的である (Nahmias, Morris, Nadelhoffer, & Turner, 2005, 2006; Nichols & Knobe 2007; c.f. Roskies & Nichols 2008)。さらに、(3) 人びとは、自由意志（あるいは道徳的責任）と決定論を両立不可能と見なすというよりも、それと機械論を両立不可能と見なすのかもしれない (Nahmias, 2011; Nahmias & Murray, 2010)。

今回の提題では、これらの知見を整理したうえで、自由意志（あるいは道徳的責任）に関する判断についてどのような未解明点があるか、またそれについてどのような心理学的研究の展開が可能かについて、検討してみたい。とりわけ、自由意志（あるいは道徳的責任）についての判断を導いている心理過程について、解釈レベル理論や二重過程モデルといった心理学理論からの展望を示してみたい。

さらに時間が許せば、自由意志（あるいは道徳的責任）についての判断を標的として、こうした実験哲学的研究や心理学的研究を進めていくことが、哲学理論に対してどのような意義を持つのかを検討したい。とくに、人びとの判断が自由意志（あるいは道徳的責任）の概念の作動を反映しているのかどうか、がしばしば係争点となってきたにもかかわらず、この係争点がどのような推論によって哲学的意義をもたらすのかははっきりとしておらず、この点にも考察を加えてみたい。